

肥やしの山から掘り起こされる手紙： 『フィネガンズ・ウエイク』における「発酵」「茶」「原子」の モチーフの連関

浅井 学

序

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の最後の作品『フィネガンズ・ウエイク』(Finnegans Wake, 1939) は、思い切り単純化して言えば、世界の歴史、人間の歴史を描いた一つの寓話である。そこでは、愛と戦い、没落と復活、父と子の対立を始めとするありとあらゆる対立、世代交代、歴史の循環といった人間の歴史に関する大きなテーマが何度も取り上げられ、それらが「夢の論理」、あるいは、非論理的で自由奔放な連想によって描かれていく。ダブリンの居酒屋の主人である主人公 H. C. Earwicker (HCE) とその妻 Anna Livia Plurabelle (ALP)、そして、三人の子供たちの物語が作品の基底に横たわってはいるけれど、歴史上、あるいは、架空の人物や場所、出来事が、互いに溶け合い交じり合い、時に分裂し、姿を変えて、変幻自在に「物語」が展開していく。主人公 HCE や ALP に至っては、山や川に姿を変じたりさえするのだ。

この特殊な物語を紡ぐのは、俗にウエイク語と呼ばれる、やはり特殊な言語である。それは様々な言語技法から成り立っているが、代表的なのは、英・仏・独・露・ラテン・ギリシャ・アイルランド語は言うに及ばず、北は北欧の言語、南はアフリカのスワヒリ語、東は日本語・中国語といった数多くの言葉を用いた他言語的な地口、そして、かばん語 (portmanteau word) である。例えば、“atoms and ifs” (原子と仮定の if) に “Adam and Eve” (聖書のアダムとイブ) を掛けたり (455.17)、word (ことば) と void (虚空) を掛け合わせて “woid” (378.29) という単語が作られたりする。そのため、一つの語句、一つの文が重層的に何通りもの解釈を持つようになり、構文の曖昧さとも相まって、テキストはいっそう多様で解釈の難しいものになっている。

そのような独特の言語で書かれた、一見つかみ所のない『フィネガンズ・ウエイク』という作品を読みほぐし理解する際大切になるのは、あるモチーフやイメージが他のモチーフやイメージとどのように結びつき、どのようにテキストの中で働き、どのように作品の言語宇宙を広げ、そこに見えざる秩序を織りなしているかを見定めることである。それはとりもなおさず作者ジョイスの想像力の広がりとその働き方を見極めることであり、言葉の芸術としての『フィネガンズ・ウエイク』の深さを把握することになる。

以上のようなことを念頭に置きながら本稿で試みてみたいのは、『フィネガンズ・ウエイク』の重要な場面のひとつ、第1巻第5章に出てくる雌鶏によって肥やしの山から掘り起こされる手紙の場面を検討し、そこに見られる幾つかの重要なモチーフのこれまで論じられていない連関を辿ってみることである。

1. 肥やしの山から掘り起こされる手紙

最初に、問題の手紙が肥やしの山 (midden) より雌鶏によって掘り起こされる個所を見ておこう。ちなみにこの手紙は、『フィネガンズ・ウエイク』そのものを象徴していると考えられている。

About that original hen. Midwinter (fruur or kuur?) was in the offing and Premver a promise of a pril when, as kischabrigies sang life's old sahatsong, an iceclad shiverer, merest of bantlings observed a cold fowl behaviourising strangely on that fatal midden or chip factory or comicalbottomed copsjute (dump for short) [...]. (110.22-26)

The bird in the case was Belinda of the Dorans, a more than quinquagintarian (Terziis prize with Serni medal, Cheepalizzy's Hane Exposition) and what she was scratching at the hour of klokking twelve looked for all this zogzag world like a goodish-sized sheet of letterpaper originating by transhipt from Boston (Mass.) of the last of the first to Dear whom it proceeded to mention Maggy well & allathome's health well only the hate turned the mild on *the van* Houtens and the general's elections with a lovely face of some born gentleman with a beautiful present of wedding cakes for dear thankyou Chriesty and with grand funferall of poor Father Michael don't forget unto life's & Muggy well how are you Maggy & hopes soon to hear well & must now close it with fondest to the twoinns with four crosskisses for holy paul holey comer holipoli whollyisland pee ess from (locust may eat all but this sign shall they never) affectionate largelooking tache of tch. The stain, and that a teastain (the overcautelousness of the masterbilker here, as usual, signing the page away), marked it off on the spout of the moment as a genuine relique of ancient Irish pleasant pottery of that lydialike languishing class known as a hurry-me-o'er-the-hazy. (111.4-24)

ここは『フィネガンズ・ウエイク』の中ではかなり読みやすい個所なのだが、それでもいちいち細かく語釈をしているときりが無い。とりあえず、以下に大意のみを示すことにする。

[大意]あの風変わりな雌鶏についてだが。真冬(早い時期?霜の頃?)がそろそろやって

来る頃、そして、春が四月を約束する頃、教会の鐘が人生の懐かしき時の歌を歌った時、凍てついてぶるぶる震えている青二才の中の青二才が、寒そうな一羽の鶏が例の運命的な肥やしの山の上で奇妙な振る舞いをしているのを見た。その山は、言い換えれば、乾燥した動物の糞工場、滑稽な底をした小さな山（要するにごみの山だ）（後略）。（110.22-26）

問題の鶏はドーラン家のベリンダ、50を越えた雌鶏（チーパリッジー鶏品評会3等賞銀メダル受賞）。この鶏が12時にひっかいていたものは、どこから見てもかなり大きな便せんらしきもの。1月末日付け、マサチューセッツ州ボストンで投函され、積み替えられている。愛するマギー、それから、家のみんなの健康。熱のせいでミルクが。ヴァン・ホーテンさん一家に。それから、総選挙[将軍の選挙]、生まれながらの紳士の素敵なお顔をして。愛する～のためのウェディングケーキの素敵なおプレゼント。有り難う。クリスティ。それから、かわいそうなマイケル神父の立派なお葬式。生涯忘れない。マギー。ご機嫌いかが。マギー。すぐにお返事を。ではこれで。双子さんたちに愛を込めて。キスを四回。聖ポールのため。聖なる将来有望な方のため。聖なる島のため。追伸。～より（イナゴがみんな食べちゃうかもしれないけれど、このサインは大丈夫）愛情いっぱいのお茶の染み。その染み、それもお茶の染みが（いつものように、ここで十分考えないでページに署名して譲り渡してしまうインチキ棟梁のあまりの不注意）「霞の彼方へ我を疾く行かせよ」として知られる、レディ・リディア気取りの感傷的な古代アイルランドの楽しき陶器[農民詩]の本物の名残を見せて、とつぜん手紙の終わりを印している。（111.4-24）

少しだけコメントしておく、最初の引用の出だしにある original hen（風変わりな雌鶏）には original sin（原罪）と original pen（独創的なペン、独創的な文筆の業）が掛かっている、その雌鶏に掘り出される手紙が『フィネガンズ・ウエイク』全体を表しているとするれば、『フィネガンズ・ウエイク』を書くことこそ原罪（the original sin）であるという主張を暗示するだろう。『フィネガンズ・ウエイク』という独創的（original）な作品を創造する行為は、神の世界創造に匹敵する、というジョイスの自負が伺われるところである。いわゆる原罪、アダムのは、知恵の実を食べて「神と同じく」善悪を知る存在になったことである。神に等しくなろうとすることは許されざる大罪なのだ。

また、雌鶏が掘り起こしていた時刻は12時（at the hour of klokking twelve）となっているが、これは『フィネガンズ・ウエイク』の中で重要な意味を持つ時刻である。前にも述べたが、『フィネガンズ・ウエイク』は歴史の循環を大きなテーマの一つにしている。ジョイスは『フィネガンズ・ウエイク』を書く時、イタリアの歴史学者ヴィーコ（Giambattista Vico, 1668-1744）の思想に大きな影響を受けた。ヴィーコによれば、人間の歴史は、神の時代、英雄の時代、人間の時代の三つの時代に分けられ、三つ目の人間の時代が進むと人は墮落し歴史は振り出しにもどるといふ。このサイクルを時計に見立てれば、人間の歴史は0時（12時）に始まり一巡して12時に

終わり、そこからまた新たなサイクルが始まる。『フィネガンズ・ウエイク』の中で12時は、新たな歴史が開始されるのを象徴する時刻なのである。

その後手紙の中身が出てくるが、長い間地中にあったため大部分が読めなくなってしまっており、その内容は断片的にしか知ることができない。この手紙が、姿を変えた『フィネガンズ・ウエイク』だとしたら、それは、例えば主人公HCEが公園で犯したという罪が何なのか断片的にしか出てこないような『フィネガンズ・ウエイク』という作品の情報構造をパロディ化しているだろう。

2. お茶会

さて、原罪や歴史の循環などという崇高壮大な話からいきなり矮小卑俗な話題に移るようだが、まず注目したいのは、手紙の最後の部分に「お茶の染み」が付いていることである (“affectionate largelooking tache of tch,” “The stain, and that a teastain”)。このお茶の染み、あるいは『フィネガンズ・ウエイク』におけるお茶のモチーフについては、これまでも色々なことが言われている。例えば、Bernard Benstockは、この手紙の染みも含め、お茶は『フィネガンズ・ウエイク』の中で「愛と性」(love and sex)を意味する決まり文句だと言っているし (Benstock 9), Margaret C. Solomonは、お茶が、「交合」(sexual intercourse)ならびに「排尿」(micturition)に関係しているらしいということを指摘している (Solomon 77)。さらに、今問題にしている手紙と『フィネガンズ・ウエイク』の対応関係から、『フィネガンズ・ウエイク』の最後の単語theが、フランス語のthé (お茶)であるという指摘もある (Henke 203-04)¹¹⁾。また、随分前のことになるが、Frances Boldereffが、お茶のモチーフと古代アイルランドの王妃 Princess Teaとの関係を指摘している (Boldereff 245)。Boldereff自身は踏み込んでいないが、この指摘には、肥やしの山との関係で面白い点がある。『フィネガンズ・ウエイク』をある程度読み慣れた者が、この肥やしの山の一節を読んだ時、その丘のイメージから、アイルランドで一番有名な丘、つまりタラの丘のことを思い浮かべるだろう。そして、タラの丘は語源的に Princess Teaとの関係があるという説を Seumas MacManus が述べているのである¹²⁾。

O'Curry says it was under, or after, Eremon, the first Milesian high king that it, one of the three pleasantest hills in Ireland, came to be named Tara – a corruption of the genitive form of the compound word, Tea-Mur – meaning “the burial place of Tea,” the wife of Eremon, and daughter of a King of Spain. (MacManus 54)

この本の出版年代 (改訂版が1921年) を考えれば、ジョイスがこの本を読んでいたか、あるいはこうした通俗語源を知っていた可能性は十分あるだろう。

以上のような指摘はそれぞれ興味深く、ジョイスがそうしたことを全て念頭に置いてお茶のモ

チーフを使っていたということは十分にありうる。そして、それはジョイスの発想の豊かさを例証するものの一つとなるだろう。しかし、本稿では上に列挙したような諸説を踏まえながらも、少し違った方向でお茶のモチーフを考えて行きたい。

雌鶏に掘り起こされる手紙は、引用にもあるように、アメリカ、マサチューセッツ州のボストンに源を発している。この点に関しては、ベンストックやソロモンも指摘するように (Benstock 9, Solomon 78), お茶がらみでボストン茶会事件 (Boston Tea Party) の連想があるだろう。世界史の時間に習う有名な出来事ではあるが、どのような事件だったのか、念のために簡単に確認しておこう。

ボストン茶会事件 Boston Tea Party

1773年、北米植民地で起こった茶船襲撃事件。同年制定の茶法は、経営難に陥っていた東インド会社に対して北米植民地での茶の独占販売権を与えたが、植民地人たちはこれを悪しき重商主義体制の強化ととらえて広範な反対運動を展開した。主要な港での茶の陸揚げ阻止が図られ、ボストン港で同年12月16日夜最初の実力行使が行われた。すなわち、秘密結社「自由の息子たち」などの急進派がモホーク・インディアンに変装して茶船を襲撃し、茶箱342箱を破壊して海中に投棄した。イギリス本国側はこの事件を本国議会の立法権に対する公然たる反逆とみなし、翌年3月のボストン港閉鎖条例をはじめとする一連の「懲罰諸法」を制定して報復した。(『日本大百科全書』)

ベンストックは問題の手紙とボストン茶会事件と『フィネガンズ・ウエイク』の関係について次のように述べている。

In actuality it is merely a chatty, newsy sort of family letter written by the American cousin, containing either news of or a reference to the Boston Tea Party. That historic act then becomes an aspect of Earwicker's misdemeanor: it was illegal, performed under cover of night, and employed disguises, although rather transparent ones to all concerned; it involved tea, a shibboleth in the *Wake* for love and sex (particularly "wetting the tea"). (Benstock 9)

ベンストックはこう言ってボストン茶会事件と『フィネガンズ・ウエイク』を結びつけるが、手紙の内容にボストン茶会事件のニュース、あるいは、言及が含まれているという点は少し言い過ぎだろう。ソロモンの方は連想があると言うだけで、それ以上にはこの件を説明してくれていない。いずれにしても少し補足するならば、この事件は、宗主国と植民地、すなわち旧世界と新世界の対立、世代の対立という『フィネガンズ・ウエイク』の中心テーマの一つを体現している。襲撃するのが「自由の息子たち」(Sons of Liberty) という「息子達」であるのも、父と子の世代対立のモチーフとなる。そのような彼の作品にとって都合のいい事件にジョイスが注目しなか

ったはずがない。

ところで、そうしたこと以上に注目したいのは、この事件が元になって、「騒動、動乱」(disturbance)のことをtea partyと呼ぶようになることである。tea partyのこの用法のOEDに載っている初例は1864年のもので、当然ジョイスもこの意味を知っていたはずである。本稿のこの後の話との絡みで言うところのこのことが最も重要になる。

3. 厩肥と発酵

ここでこの手紙が掘り出される丘の方に目を転じてみよう。この丘は“that fatal midden or chip factory or comicalbottomed copsjute (dump for short)”と呼ばれるように肥やし(厩肥)の山である。雌鳥が掘り起こしたのは真冬ということだが、冬に肥やしの山がどうなるかという、湯気が立つ。いや、厩肥の作り方は大きく二種類あり、必ずしもそうならない場合もあるのだが、とにかく、これも百科事典の記述を引いてみよう。

厩肥

家畜の糞尿(フンニョウ)や敷き料(藁(ワラ)、おがくずなど)を堆積(タイセキ)腐熟させたもので、家畜の種類や敷き料の違いによって、できる肥料成分の含有量には大きな差がみられる。(中略)厩肥を腐熟させるには、水を十分に加えて踏圧し嫌氣的に20~30℃で発酵させる低温堆積と、緩く堆積し60~70℃の高温下で発酵させる高温堆積の二つの方式がある。後者は窒素の損失はあるが、病原菌や害虫が死滅する利点がある。『日本大百科全書』

60~70℃の高温下で発酵させる高温堆積の場合、肥やしの中が発酵して熱を持って、そのために寒い時期には湯気が立ち上ることになる。実際この肥やしの山が発酵して熱をもっているというのは、“Heated residence in the heart of the orangeflavoured mudmound”(オレンジ風味の泥山の真ん中にある熱い住み処)(111.33-34)によって確認することができる。Danis RoseとJohn O'Hanlonは、この熱を、発酵ではなく「堆肥の山の中の圧力」(pressure in the compost heap)によるものだと考えているが、それはちょっと無理な発想だろう(Rose and O'Hanlon 81)。

さて、この「発酵」を英語でいうと、ferment,あるいは、fermentationになるのだが、このferment,あるいは、fermentationには、「発酵」の他に、「騒ぎ、動乱、興奮」という意味がある。ボストン発の手紙のお茶のシミがボストン茶会事件を連想させる、つまり、「騒動、動乱」のことを思い出させるのと同じように、この肥やしの山もまた騒ぎや動乱といったものを想起させる。この二つのモチーフはfermentあるいはfermentation(騒ぎ、動乱)という言葉のイメージによって結びつけられ、ここの箇所に出てきていると考えられるのである。

また、お茶と発酵の関係ということに話を限れば、fermentはもともとラテン語で「煮立つ」

(to boil) を表す *fervere* に由来する言葉で、英語の *fervent* (熱い, 焼ける, 燃える) は同根の言葉である。boiling がお茶を入れる時の熱湯を思い起こさせるのも、お茶と発酵の結びつけのもとになっているだろう。また、お茶と発酵という二つの事柄は、茶の葉に含まれる酵素の働きを十分に活用して製造したのが発酵茶 (紅茶)、つまり英語で言う *tea*, であるということを考えれば、それだけでも両者を結びつけるのに十分な理由があると言えるだろう。

実際にテキスト上でもお茶と発酵している肥やしの山のイメージは重ね合わされている。前に引用した一節の最後の部分に注目して欲しい。

The stain, and that a teastain (the overcautelousness of the masterbilker here, as usual, signing the page away), marked it off on the spout of the moment as a genuine relique of ancient Irish pleasant pottery of that lydi alike languishing class known as a hurry-me-o'er-the-hazy. (111.20-24)

[大意] その染み, それもお茶の染みが (いつものように, ここで十分考えないでページに署名して譲り渡してしまうインチキ棟梁のあまりの不注意) 「霞の彼方へ我を疾く行かせよ」として知られる, レディ・リディア気取りの感傷的な古代アイルランドの楽しき陶器[農民詩]の本物の名残を見せて, とつぜん手紙の終わりを印している。

この部分にはお茶の染みの文脈を受けて, ギリシャ語の *kautous* (= boiling), *spout* (ティーポットなどの注ぎ口), *pottery* (陶器) といったお茶のモチーフがたくさん出てくる。そのモチーフの流れで読んでいけば, *the hazy* はお茶の湯気を意味するだろう (*hazy tea*)。それと同時に *pleasant pottery* に掛けられている *peasant poetry* (農民詩) の文脈で読めば *midden* の文脈を受けて, *the hazy* は発酵して発熱した厩肥の山から立ち上る湯気を指すことになる (*hazy midden*)。 *the hazy* には「お茶の湯気」と「発酵した厩肥の山から立ち上る湯気」の二つのイメージが重ね合わされているということなのだ。

4. 発酵と原子

お茶, 発酵の話で「騒動, 動乱」ということに言及したが、『フィネガンズ・ウエイク』の中での「騒動」と言えば, 最も印象的な個所の一つに第二巻第三章の「原子核破壊実験」のくだりがある (ラザフォード (Ernest Rutherford, 1871-1937) の原子核破壊実験への言及があるので便宜的にこう呼ぶことにする)。そこでは, 核反応によって「パースレリア」(Parsuralia: 架空の国であり, 同時に HCE の身体を表す) に大混乱が引き起こされる様子が描かれている。詳しくは述べないが, ここには原子爆弾が炸裂するイメージもかぶさっている。この一節は, 戦場で排便をした後, 紙ではなく手近にあった芝で尻を拭いて狙撃されたロシア将軍の話に基づいた第二

卷第三章の一挿話「バックリーはいかにしてロシア將軍を撃ったか」の銃撃場面の変形（デフォルメ）であり、ロシア將軍を原子（atom）とアダム（Adam）=HCEに結びつけ、かつ同時にFWの創作原理にも言及するという密度の濃い一節である⁽³⁾。

The abnihilisation of the etym by the grisning of the grosning of the grinder of the grunder of the first lord of hurtreford expolodotonates through Parsuralia with an ivanmorinthorrorumble fragoromboassity amidwhiches general uttermosts confussion are perceivable moletons skaping with mulicules while coventry plumpkins fairlygosmotherthemselves in the Landaunelegants of Pinkadindy. Similar scenatas are projectilised from Hullulullu, Bawlawayo, empyreal Raum and mordern Atems. They were precisely the twelves of clocks, noon minutes, none seconds. At someseat of Oldanelang's Konguerrig, by dawnnybreak in Aira. (353.23-33)

[大意]初代ハーターフォード卿のすりつぶし器のすりつぶしによる原子の生成消滅が、パースネリア中で爆発的に生じ、大音響を轟かせる。その中でこの上ない混乱が広く観察される。分子とともに原子が逃げ出し[金づちが分子を使って創造し]、田舎者がピカデリーの優雅さで身を包む。同様な場面がホノルル、ブラワヨ、ローマ帝国、エジンバラから投射される。時はまさに十二時、零分零秒。一日中続いた戦争の日没の時間に[昔デーンローの行われた王国のとある座席で]、エールの夜明けまでに[夜明けのそばで]。

雌鶏が掘り返す肥やしの山には、ロシア將軍の銃撃場面を変形したこの原子核破壊実験のイメージ、あるいは原子核反応のイメージも結びつけ、重ねあわせられているのではないだろうか。こう言うと少々唐突な話の展開に聞こえるかもしれないが、「騒動」以外にも ferment, fermentation がらみで、この二つの場面には結びつきがある。

原子核破壊実験のくだりには、「分子とともに原子が逃げ出し[金づちが分子を使って創造し]」(moletons skaping with mulicules)、そして、「田舎者がピカデリーの優雅さで身を包む」(coventry plumpkins fairlygosmotherthemselves in the Landaunelegants of Pinkadindy) という一節があるが、これは創造行為によって（語弊のある表現だとは思いますが）「卑しいもの」が「高貴なもの」に変化することを言っている。これを原子や分子といった物質の文脈に返してやれば、ここの部分が卑金属を貴金属、とりわけ、金に変える錬金術への言及であることは一目瞭然だろう⁽⁴⁾。その錬金術において、卑金属を貴金属に変えると考えられていたのが ferment（別名 philosopher's stone（賢者の石））なのである。そして、fermentにより金属の内部で引き起こされる変化を fermentation と呼んだ（OED の“ferment,” “fermentation”の項参照）。原子核破壊実験のくだりは、そういう意味での fermentation を描いた一節でもあるのだ。

そして、肥やしの山をロシア將軍の銃撃場面と原子核破壊実験のくだりに結びつけて読むべき

もっと直接的な証拠がある。雌鶏に掘り起こされる手紙の中には、“the general’s elections” (111.12) という一節がある。『フィネガンズ・ウエイク』の現行の翻訳は二つあるが、そのどちらもがこの個所の第一の意味として「総選挙」(general elections) を採用している¹⁵⁾。Roland McHughの注釈でもこの個所に“General Elections”と注をつけている (McHugh 111)。確かにリアリステックな読み方をすればこちらの方が手紙に書かれているべき内容として相応しいかもしれない。少なくとも『フィネガンズ・ウエイク』の訳としては間違いではない。しかし、手紙の書き手が「リアリステック」なレベルで何を考えているのかはさておき、この言葉を文字通り「將軍の選択肢」と解釈し『フィネガンズ・ウエイク』全体の中で考えると、どうしても、「尻拭き紙がないけれど芝で拭いておこうか、それとも拭かないでおこうか」、あるいは、「紙は持っているけれど、もったいないから芝で拭いておこうか、どうしようか」という「ロシア將軍の選択肢」と考えざるをえないのである。

また、最初の引用のすぐ後のところで、ロシア將軍の話を取り起こさせるような一節も出てくる。

Well, this freely is what must have occurred to our missive (there’s a sod of a turb for you! please wisp off the grass!) [. . .]. (111.31-32)

[大意]おおまかに言えば、これが我らの手紙に起こったにちがいないこと（あなたには芝。繕って束にしてどうぞ。）(後略)

そういうことを念頭において発酵している厩肥の山（「糞」がらみでも関係しているけれど）を考えていると、くだんの原子核破壊実験のくだりをどうしても連想させられてしまうということである。

さらに言うておけば、原子核破壊実験、あるいは、核反応そのものという訳ではないが、原子の話が、お茶、そして、ferment（発酵、酵母、興奮）のモチーフとテキストの深層・表層で結びついている個所が、『フィネガンズ・ウエイク』の後の方に出てくる。それは、最終章の手紙（雌鶏に掘り起こされた手紙は姿を変えて何度か『フィネガンズ・ウエイク』の中に現れる。これはその最終バージョン）が出てくる直前の個所で、再創造によってヴィーコのサイクルが更新される準備過程のことを述べているところである。ちなみに、下の引用は煩瑣になることを避け、一部省略しているが、その省略したところには「厩肥から生まれた手紙」(letter from litter) (615.1) という語句も出てくる。

Our wholemole millwheeling vicociclometer [. . .] receives through a portal vein the dialytically separated elements of precedent decomposition for the verypetpurpose of subsequent recombination so that [. . .] the sameold gamebold adomic structure of our Finnius the old One, as highly charged with electrons as hophazards can effective it, may be

there for you, Cockalooralooraloomenos, when cup, platter and pot come piping hot, as sure as herself pits hen to paper and there's scribings scrawled on eggs. (614.27-615.10)

[大意]我らがヴィーコ式車輪回転記録器は後に続く再結合のために先行する解体でバラバラになった諸要素を門脈から取り入れる。彼女が紙にペンをおろし卵の上に走り書きがあるのと同じくらい極めて確実に（コケココー）、カップと皿とポットが熱々になる時、偶然が引き起こせる限り多価に荷電された色事に大胆な昔ながらの我らがフィニウスがそこにいるように。

原子の話と、お茶の話が出てきているのは一目瞭然だが、もう少し詳しく見ておこう。“highly charged with electrons”というくだりは、物理学的に読めば、原子や分子が2価以上の電子を得てイオン化していると言う意味になる。イオン化した分子はイオン結合できるので、この一節は性的文脈を取れば「合体」の準備OKということの意味するだろう。また、目を転じてwhen以下を見てみると、“cup, platter and pot come piping hot”とあり、これはお茶、あるいは、お茶の時間（tea time）のイメージである。これも性的文脈では興奮状態を意味するだろう（はっきり言ってしまえばcupとpotがそれぞれ女性と男性を象徴する）。そうすると、“highly charged with electrons,” “cup, platter and pot come piping hot”には比喩的な意味における ferment, すなわち「興奮」のモチーフがかぶさっていることになる。“cup, platter and pot come piping hot”の piping hotは「シューシュー煮え立つ」、つまり、“boiling”を暗示するから、fervere (=to boil) から派生した ferment とは語源的なつながりからも結びついていくことになる。

さて、原子とお茶の話が出てきていて、その原子の話とお茶の話が比喩的に ferment のモチーフになるという点を確認したが、ここの一節にはもっと直接的に ferment のモチーフが出てきている。“as hophazards can effective it”という一節に注目してほしい。“as hophazards can effective it”は一義的には“as haphazards can effect it”, つまり、「偶然が引き起こすことができる限り」という意味だが、ここには明らかに hop という言葉が掛けられている⁽⁶⁾。hopにはビールの香りづけに使うホップ、或いは俗語でビールそのものの意味があるが（OEDには1929年のW.R.Burnettの例が載っている）、ビールは「発酵させて」（ferment）作る飲み物である。そしてなにより、「ホップの雌穂には野生の酵母菌が多く繁殖するので、これをパン用酵母などに用いられる」（『日本大百科全書』）と辞書にあるように、ホップそのものも酵母（ferment）と密接な関係がある（ホップから作るホップ・イースト（hop yeast）というものがある）。実際、ジョイスがパン用酵母としてのホップを念頭に置いていたというのは文脈からも確認できる。上の引用の出だし“Our wholemole millwheeling vicociclometer”の“wholemole”には、McHughの注釈にもあるように（McHugh 614）、wholemeal（全粒小麦粉）が掛けられており、wholemealを使った wholemeal bread というパンが存在する。また、“millwheeling”の mill は小麦を挽く「製粉機」の意味である。

さて、そうすると、“as hophazards can effective it”の部分はホップの持つ酵母菌・酵母(ferment)を意識しながら、「ホップの偶然(危険, 冒険)が引き起こせる限り」と解釈することが出来るわけで、全体としては「実際、カップと皿とポットが熱々になる時、ホップの偶然が引き起こせる限り多価に荷電された昔ながらの我らがフィニウスが、そこにいるように」とお茶の話と発酵と原子の話が結びついて出てきているということになる。

この場面は、『フィネガンズ・ウエイク』も終わりに近づき、『フィネガンズ・ウエイク』の重要なモチーフと思想を最後にもう一度確認している場所である。そのような場所で、お茶と発酵と原子の話が同じ文の中に組み込まれ関係付けられているということは、ジョイスの頭の中でこれらのモチーフが重要な役割をもって結びついていたということである。そうだとすれば、本稿で問題にしてきた肥やしの山の「発酵」(fermentation)の中に「バックリーはいかにしてロシア將軍を撃ったか」の中にある原子核反応の大騒ぎ(fermentation)のイメージを重ねて見てやっても決して的はずれな読みというわけではないだろう。

5. 結語

以上、雌鶏が肥やしの山からお茶の染みのついた手紙を掘り出すくだりを検討し、「お茶」、「発酵」、さらには「原子」という三つのモチーフのつながりと、そのつながりが駆使されたテキストの広がり的一端を見てきた。その過程で明らかになったように、三つのモチーフの連関の核となっているのは fermentation あるいは ferment という言葉である。前にも述べたように、fermentation も ferment も錬金術において重要な意味を持つ言葉であった。錬金術とジョイスの創作との対応関係、すなわち、卑金属から金を生み出すように猥雑な現実から輝かしい芸術作品を生み出すという話はよく言われることで、それ自体はいまさら繰り返すまでもない。しかし、もっと具体的に、もっと踏み込んで、ジョイスが『フィネガンズ・ウエイク』を書いていた時、とりわけ「雌鶏が手紙を掘り出す肥やしの山」や、「原子核破壊実験」や、「ヴィーコ式車輪回転記録器」の一節を書いていた時、ferment あるいは fermentation という言葉が彼の頭の中で ferment (酵母/賢者の石)の役割を果たし、彼の想像力がふつふつと沸き立っていたとまで言い切ってしまうと決して言い過ぎにはならないだろう。

注

*本稿は日本ジェイムズ・ジョイス協会第17回大会(2005年6月18日-19日)の *Finnegans Wake Workshop* における発表原稿を加筆修正したものである。『フィネガンズ・ウエイク』からの引用の後に引用個所の頁と行数を示す。『フィネガンズ・ウエイク』のテキストの語釈に関しては(特に英語以外の言語に関して)、McHughの注釈書に大いに助けられているのだが、本稿では煩瑣になるのを避けるために、特にフォーカスする必要がない時にはあえて言及することを避けている。また、「大意」の

作成においては、引用文献に挙げた二つの日本語訳を参考にさせて頂いている。

- (1) 『フィネガンズ・ウエイク』の最後の単語は、(少なくとも見かけは) 英語の定冠詞the で、これが最初の言葉riverrunにつながり物語が循環するようになっている。言うまでもなく、これはヴィーコの循環史観が『フィネガンズ・ウエイク』の作品構造に与えた影響の一例である。
- (2) しかし、これには異説もある。“Tara (Meath), Teamhair, ‘elevated place’, ‘assembly hill’. This is the traditional interpretation of the name of this famous ancient royal site, as well as of other places called Tara, such as Tara Hill in Wexford. But recent place-name scholarship suggests that the true meaning is probably based on the personal name of the earth goddess Temair, whose own name may mean ‘dark one’.” (*A Dictionary of Irish Place Names* 118)
- (3) 詳しくは、拙著『ジョイスのからくり細工』第7章「ジョイスと原子核破壊実験」を参照されたい。
- (4) “moletons skaping with mulicules”と“coventry plumpkins fairlygosmotherthemselves in the Landaunelegants of Pinkadindy”については少し詳しい説明が必要だろう。まず、“moletons skaping with mulicules”の方だが、“moletons”にはロシア語で「ハンマー」の意味を持つmolatと英語のatoms (原子) が、“skaping”にはノルウェー語で「作る、創造する」の意味を持つskapeと、英語のescapingが、“mulicules”には英語のmolecules (分子) とmull (粉, 粒子/混乱, ごたごた) が掛けられている。そこから「分子とともに原子が逃げ出し」、あるいは「金づちが分子を使って創造し」などという意味が生まれる。“coventry plumpkins fairlygosmotherthemselves in the Landaunelegants of Pinkadindy”の方は、まず“coventry plumpkins”にCoventry (イングランド West Midlandsの都市) とcountry bumpkins (田舎者) が掛かっている。“fairlygosmotherthemselves in the Landaunelegants of Pinkadindy”はfairly smother themselves in the London elegance of Piccadillyがベースになっているので、概略「田舎者がピカデリーの優雅さで身を包む」という意味が読み取れる。ちなみに、“plumpkins”にはpumpkins (カボチャ) が、“fairlygosmotherthemselves”にはfairy godmother (おとぎ話で主人公を助ける妖精, 困っている時などに突然現われる親切な人。「シンデレラ」の場合は魔法使いのおばあさん) が、“Landaunelegants”にはlandau (carriage) (ランドー型馬車) が掛かっている、これらはシンデレラのカボチャの馬車への言及である。これが「錬金術」のテーマと関係しているのは言うまでもない。
- (5) 柳瀬訳が「踏選挙」、宮田訳は「総選挙」となっている。
- (6) ただし、McHughの注にはhopに関する記述はない。

参考文献

- Benstock, Bernard. *Joyce-Again's Wake: An Analysis of Finnegans Wake*. Seattle: University of Washington Press, 1965.
- Boldereff, Frances Motz. *Reading Finnegans Wake*. Woodward: Classic Nonfiction Library, 1959.
- Henke, Suzette A. *James Joyce and the Politics of Desire*. New York: Routledge, 1990.
- Joyce, James. *Finnegans Wake*. 1939. London: Faber and Faber, 1957
- McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Rev. ed. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1991.
- MacManus, Seumas. *The Story of the Irish Race: A Popular History of Ireland*, Rev. ed. Old Greenwich, Connecticut: The Devin-Adair Co., 1921.
- Oxford English Dictionary*. 2nd Ed. CD. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Room, Adrian. *A Dictionary of Irish Place Names*. Belfast: Appletree Press, 1986.
- Rose, Danis and John O'Hanlon. *Understanding Finnegans Wake: A Guide to the Narrative of James*

Joyce's Masterpiece. New York: Garland, 1982.

Solomon, Margaret C. *Eternal Geometer: The Sexual Universe of Finnegans Wake*. Carbondale: Southern Illinois University Press, 1969.

浅井学『ジョイスのからくり細工：「ユリシーズ」と「フィネガンズ・ウエイク」の研究』（あぼろん社, 2004年）

『日本大百科全書』（電子ブック版）（小学館, 1996年）

宮田恭子訳『抄訳フィネガンズ・ウエイク』（集英社, 2004年）

柳瀬尚紀訳『フィネガンズ・ウエイクI・II』（河出書房新社, 1991年）

（2005年10月3日受理）

（あさい まなぶ 文学部助教授）